
春先に吹く嵐

すず李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春先に吹く嵐

【Nコード】

N6755H

【作者名】

すず李

【あらすじ】

新一と蘭がアメリカ旅行する少し前に起こったある出来事とは…。

序章くあの時の出来事く（前書き）

初投稿です。

これを読んでどんな風に思われるか、ちよつとドキドキしています。

序章くあの時の出来事く

アンアンアン…！

「ん？」

学校からの帰り道、元太、光彦、歩美と別れてコナンと哀だけになった直後、犬の鳴き声が聞こえ、コナンが振り向くとそこには仔犬がいた。

茶色で尻尾がくると丸まっている、目がまん丸な可愛い仔犬だ。

「仔犬？ん？首輪してる…。迷子か？」

コナンが仔犬の首輪を見て言った。

それに首輪には何か文字が彫ってあった。

コナンがその文字を読む。

「シェリー？」

「あら、私のコードネームと一緒にね…」

「灰原…」

哀は仔犬を抱いて言った。

「案外、私を追ってきた彼らの手先だったりして…」

「おいおい…」

「冗談よ」

「あのなあ…」

「すみません！」

コナンが哀に言おうとした時、若い女が声を掛けてきた。

「あの、その仔犬、私が飼ってる仔犬なんです！家から飛び出しちゃって…」

全速力で走ってきたのだろう、若い女はハアハアと息切れしている。

「はい」

哀は抱いていた子犬を飼い主の若い女に渡した。

「ありがとう。助かったわ。このまま見失って、見つからなかったらどうしようかと思ってたの」

「お姉さん、この仔犬とても大切にしてるんだね！」

コナンが若い女に聞く。

「ええ、半月前に亡くなった父が最後に贈ってくれた子なの。私の誕生日に…」

若い女はそう言って愛しそうに仔犬を見た。

その後、彼女にお礼にお茶をご馳走したいと言われたコナンと哀だが、断った。

お礼をされるような事はしていないと思ったからだった。

哀も同様に。

「フツ…」

コナンは去っていく若い女と仔犬を見て思わず笑みがこぼれる。

「あら、何か良い事でも思い出したのかしら？」

哀が聞いてくる。

「別に良い事じゃねーよ。ただ、ちょっとあの時の事を…」

コナンはあの時の事、1年程前に蘭と行ったアメリカ旅行の少し前に起こった出来事を思い出していたー。

「あ、あった！良かったー！」

その頃、蘭は園子に付き合ってもらい、学校からそう遠くない紅茶

の店『ランゼ・レビー』にいた。

「良かったね、蘭。その紅茶の葉、人気ですぐ売り切れちゃうんでしょ？」

蘭が手に取っているのはこの店で1番人気の紅茶の葉だった。

「そうなの。お母さんの裁判の勝訴のお祝いに持って行きたかったから良かった。お母さん、この紅茶好きだから」

「あら？ 蘭、顔が幸せ笑顔全開になってるけど、紅茶があった事がそんなに嬉しいの？」

本人の気付かぬうちに笑顔になっていたらしい。

「ち、違うわよ！ ちょっと昔の事、思い出してただけ！」

そう、蘭もまた1年程前に新一と行ったアメリカ旅行の少し前に起こった出来事を思い出していたのだった――。

序章くあの時の出来事く（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

このお話は新一と蘭がアメリカ旅行の前にこんな事が起こっていたら…と思って書きました。

まだ序章ですが…。

次回から新一が登場します！

感想、評価等頂ければ嬉しいです。

第1章くアメリカからの呼び声く

「え？ロスへのチケット、私にも？」

「ああ、母さんが蘭も一緒につて。どうする？」

「どうするって…」

朝、並んでの登校中、新一が蘭に昨日送られてきたロサンゼルスにいる両親からの手紙について話した。

その手紙には春休みに蘭と一緒に遊びに来てはどうかと書かれ、二人分の飛行機のチケットが同封されていたのだ。

二人分のチケットが同封されている時点で「来てはどうか？」じゃ「必ず来い」という言葉に等しいんじゃないか…と思った新一。

という事で、今朝、早速蘭に聞いてみたのだ。

「お父さんに聞いてみるから返事、ちょっと待ってくれる？」

蘭は少し考えた後、そう言った。

幼なじみの親がいるとはいえ、海外。

近くに遊びに行くのとはわけが違う。

新一もすぐに返事はもらえないだろうと思っていたので「ああ」と気軽に答えた。

そんな話を話していたら彼らの通う帝丹中学に到着した。

「ただいま」

夕方、学校が終わり、毛利探偵事務所のドアを開けた蘭。

「おお、蘭、帰ったか」

そこには小五郎だけでなく、覚えのある顔の男の姿もあった。

「やあ、蘭ちゃんお帰り。じゃあ、毛利さん、予定はさっき言った通りだから宜しく！」

「ええ！了解です！」

小五郎は機嫌良さそうに言った。

小五郎と話していた男は「じゃあね、蘭ちゃん」と言って事務所を去って行った。

「さっきの人、確か町内会の役員してる人だね？どうしたの？何かの依頼？」

蘭は特に深い意味は持たずに聞いた。

「いや、町内会の旅行の日程が決まったから知らせに来てくれたんだよ」

「あ、毎年やってる行事ね！今年は何処行くの？」

「北海道に五泊六日だと。（北海道といやー、やっぱ海の幸にラム肉に何といっても地酒だよな…ぐふふふ…）」

「ねえ、お父さん！いつ！？いつ行くの！？」

蘭はすでに北海道に思いを馳せていた小五郎の肩を掴んで真剣に聞く。

もしかしたら父にアメリカ旅行の事を内緒で行けるかもしれないと思ったのだ。

普段から新一の事をあまり良く思っていない小五郎のこと、二人でアメリカに旅行に行きたいなどと言えば絶対反対するだろう。

だから蘭は今日一日、小五郎をどう説得しようかと考えていた。

しかし、もしアメリカ旅行と町内会の旅行の日程が重なっていれば、黙ってアメリカ旅行してもバレない！

そして、小五郎の口から出た言葉は…蘭が求めていたモノだった―。

しかし、町内会の旅行の日程の急な変更で小五郎の方が一足早く帰って来る事になり、アメリカ旅行の事がバレ、1年以上経っても「駆け落ちごっこをしていた」と言われる事になろうとは知らない蘭であった。

第1章くアメリカからの呼び声く（後書き）

すず李です。

読んで下さってありがとうございます。

新一達がNYにいった時期は四月の高校入学式前の春休みという事になっていきます。

有希子さんが四月からサマータイムを忘れていた事やアメリカへ旅行に行く日程等を考えたらこの時期が良いかなと思いました。

高校生になりたてと言われていましたが、それは高校合格（小中高＞大く一貫校の場合もありますが）＝高校生という見方をして頂ければと思います。

第2章〈一本の電話〉

リリリリ…。

夜、毛利家のリビングの電話が鳴った。

「もしもし、毛利ですが…」

蘭が受話器を取る。

『あ、蘭、ちょっと良いか?』

「新一? どうしたの?」

『明日、迎えに来なくても良いからな。学校に早めに行かなきゃなんねーからさ』

「え? 学校で何かあるの?」

『まあな。じゃ、それだけだから』

「あ、ちょっと新一! ?」

蘭はもっと詳しく聞こうとしたが、新一はさっさと電話を切ってしまった。

「何よ、もう」

不満気味に受話器を戻す。

「ふぁ？どうした？」

酒を飲んで酔いつぶれた小五郎が娘に聞く。

「何でもない！って、お父さん！何度も言ってるけど、こんな所で寝ないでベッドで寝てよね、もう」

娘の返事を聞く前に完全に眠りつつある小五郎であった。

翌朝、蘭はいつもより早めに家を出た。

新一の事が気になっていたからだ。

（何で早めに行かなきゃいけないんだろう…。サッカー部はもう引退したし、もしかして後輩の指導とか？）

新一が、何故早く学校へ行くのか考えながら歩いているうちに校門まで来ていた。

教室に入る前にグラウンドを見てみる。

野球部やサッカー部の部員が練習しているようだが新一の姿はない。

新一はどこで何をしているのかと思いつつ自分のクラスへ向かう。

自分のクラスの隣、つまりB組にさしかかった時、何かの物音が聞こえた。

蘭が何だろうとB組を見ると…。

蘭は目を見張った。

そこには抱き合っている新一と女子の姿があったから…。

二人は蘭に気付いていないようだった。

蘭は何も言わず、隣の自分のクラスに入り、自分の席に座った。

はつきり見えなかったが、新一と一緒にいた女子は学年で一二を争う美人と評判のB組の江崎留衣だったのではないかと蘭は思った。
(新一、江崎さんと付き合ってるのかな…。別に新一が誰と付き合いおうと私の知った事じゃ…。でも…。どうして？どうしてこんなにも胸が苦しいの？)

蘭は、自分が何故こんなにも動揺しているのか分からなかった…。

第2章〈一本の電話〉（後書き）

こんにちは、すず李です。

読んで下さりありがとうございます！

最後の新一と留衣の場面での蘭ですが、今の蘭なら突撃してそうですが、まだ新一への気持ちがあんまり分かっていない時期という事でこういう感じにしてみました。

最終回までには蘭らしい所を見せられたら良いと思います。

もちろん新一にも見せ場があるように頑張ります！

最初、新一主役で書き始めたのですが、いつの間にか蘭主役になっている感じが…。

第3章〈気持ち〉

「おはよ！蘭！」

園子が声を掛けてきた。

頭がぐるぐる回って思考停止していたようで、もうぞくぞくと生徒達が登校してきている。

「お、おはよ、園子！」

蘭は平静を装って園子にそう言った。

「…どうしたの、蘭？何かあった？」

小さな頃からの付き合いの園子は蘭がいつもと違うのに気付いた。

さすが親友！

「何でもないよ。ただ、ちょっとビックリしただけ…」

最後の方は声が小さくなってしまった。

「蘭…何があったか知らないけど、私は蘭の味方だからいつでも相談に乗るからね！」

「ありがとう、園子」

蘭は何も聞かなくてくれる園子に感謝した。

それから二人で昨日のテレビの話や、最近騒がせている通り魔事件の事や新しく発売された服の事などを始業時間まで話した。

新一もいつの間にか教室に戻っており、男子達と話していた。

帰りのホームルーム終了後、蘭は新一と一緒に帰ろうと誘いに行った。

帰りに江崎さんとの事を聞くつもりだったのだ。

「新一、一緒に帰ろう？」

蘭は普段通りに言った。

「悪い、蘭。今日は一緒に帰れねえや。園子とか誘って見たらどうだ？」

「な、何か用事でもあるの？」

「ちょっとな。じゃあな」

新一はそのまま教室を出て行った。

（新一…）

また…胸が痛む…。

新一とは小さな頃からいつも一緒に、隣にるのが当たり前のようになっっていた。

だから今、蘭は新一が遠くに感じられた。

第4章〈想いは果てず〉

翌朝、新一と蘭はいつものように一緒に登校していた。

「ね、ねえ、新一。江崎さんと付き合ってるの？」

蘭は昨日聞けなかった事を思い切って聞いた。

「へ？何で俺が江崎と付き合ってるんだよ！」

新一が訳が分からないという風に言った。

「だって昨日…」

その続きが言えない…。

言って、もし新一と留衣が抱き合っていたのが真実なら…。

どうしてか、それを知るのが怖かった。

ただの幼なじみに彼女がいるのか聞くだけなのに…。

「昨日、何だよ」

黙ってしまった蘭に新一が聞いてきた。

「な、何でもない！」

結局何も言えなかった。

「はぁ？何だよ、それ！ちゃんと話せよな！」

新一は少し不機嫌そうに言った。

「だから何でもないって！それから、私アメリカ旅行止めとくね」
こんな変な気持ちの状態で新一とアメリカになんて行けないー。

蘭はそう思った。

「え？もしかしておじさんに反対されたとか？」

新一は蘭と行けると思っていたのか、意外そうに言った。

「そうじゃないけど…。とにかく行けないから！」

新一と留衣の事が気になるから行けないとは言えなかった。

「訳くらい話せよ！訳くらい！さっきから肝心な事何も言ってるぞ。それに何か変だぞ蘭」

最後、新一は少し心配そうに言った。

（誰のせいで変になってると思ってんのよ！）

蘭は心の中で言った。

そして…新一の方が正しい事を言っていると思いがちながらも…。

「何で一々全部新一に話さなきゃいけないのよ！」

バキッ！！

蘭の拳が電柱にめり込み、それにヒビを入れる。

「ら、蘭？」

新一が恐る恐る聞く。

「ふん！」

蘭はさっさと歩いていく。

「ま、待てよ、蘭！」

結局何も話さないまま新一達はクラスに着き中に入った。

「お！今日も夫婦仲良くご登校ですか？羨ましいなあー！」

クラスメイトから、からかいの言葉が掛かる。

「だから違うっつーの！たく、毎回毎回」

新一は自分の席に鞆を置いてクラスの友達の手所へ行く。

蘭も自分の席へ。

「ねえ、蘭。これ言うべきか迷ったんだけど言うね」

蘭の席にクラスの友達 of 博美がやって来て言った。

隣には園子もいる。

「どうしたの？」

「実はね、見ちゃったのよ！昨日、学校の帰りに買い物して帰る途中に工藤君と隣のクラスの江崎さんが一緒にいるのを！」

「え…？ホ、ホントに？」

「うん、間違いないよ！あれは工藤君と江崎さんだった！」

博美は断言した。

「全く、新一君のやつ！蘭がいながら別の女に手を出すとは！信じられない！」

園子が怒りをあらわにして言った。

「私と新一とは幼なじみで彼女じゃないし、あいつが誰と付き合おうが私は別に…」

「「ホントに？」」

園子と博美が疑わしげに聞いてくる。

蘭は「ホントホント」と言っているが、やはり二人は付き合っ

いるのかだろうか、昨日一緒に帰れなかったのは留衣とデートするからだったのだろうか。と新一と留衣の事が気になって仕方なかった。

第4章〈想いは果てず〉（後書き）

お久しぶりです。すず李です。

状況がほとんど進んでいません…。

次回では少し動きがあります。

最終話まで後少しなので、もう少しお付き合いして頂ければ嬉しいです。

感想、評価など頂ければ幸いです。

ではまた次回で。

第5章く2人の距離く

その日、新一と蘭が会話することなく帰りのホームルームの時間になった。

「えー、みんなも知っていると思うが、今、髪の長い若い女性を狙った通り魔事件が起こっている。女子はもちろん、男子も気を付けるように！」

担任の教師が言いながら生徒に通り魔事件に関するプリントを配布する。

そこには通り魔事が出た場所や被害者の特徴や生徒達が気を付ける事などが書かれていた。

（そういやこの通り魔、確か全部夕方に犯行に及んでるんだよね…。通り魔が出たのは、千波町、輪水町、曾我茂町、最上町…ん？ま、まさか！？）

新一は配られたプリントに載っている通り魔が出た場所を見て、あの事に気付いた。

「それじゃあ、今日はこれまで」

担任の教師がそう言うのと日直の掛け声で「起立、礼」をし、今日の授業は終わった。

新一はすぐに周りを見渡し蘭を捜す。

が、その姿は見えない。

その後、数人の友人に声を掛けられ、少し時間を使ってしまった。

「園子、蘭知らないか？」

新一はまだ教室にいた園子に聞いてみた。

「蘭なら、お母さんへのプレゼント買いに安角町の『ランゼ・レビ』っていう紅茶の店に行くからって、すぐ帰ったわよ」

（安角町だと！？）

それは新一が今一番聞きたくない言葉だった。

「ていうか、工藤君、隣のクラスの江崎さんと昨日一緒にいたらしいけど、付き合ってる…の？…っていなくなってるし…」

新一に留衣との事を聞こうとした園子だが、すでにそこに対象者の姿はなく…。

（蘭！？）

新一は教室を飛び出していた。

安角町の『ランゼ・レビ』はここからそう離れていない…走れば追いつける！

その頃蘭は、安角町に入っていた。

蘭は先日、母親の英理が不利と思われた裁判を逆転させ勝訴したお祝いに英理の好きな紅茶の葉をプレゼントしようとしていたのだ。

（お母さんの葉の他に私のも買おうかな…それで新一にもおすそ分けして…って何で私があんな奴に分けなきゃいけないのよ！）

そんな事を思いながら、人通りのない道を歩く蘭の背後で黒い陰が動く…。

（蘭…！どこだ！？）

新一も安角町に入っていた。

蘭との距離は縮まっているとは思いますがまだ見えない。自分の気付いた事が真実なら蘭が危険かもしれない。

蘭の姿が見えない事が、新一の焦りと不安を広がらせる。

第5章く2人の距離く（後書き）

こんにちは、すず李です。

園子に「新一君」と呼ばせるか「工藤君」と呼ばせるか悩みました。1度だけ彼に対して話した際に「工藤君」呼びだったのでこちらにさせて頂きました。

後、紅茶の店『ランゼ・レビー』と帝丹中学・高校の距離は同じくらいだという設定です。

感想、評価なども頂ければ嬉しいです。

それではまた次回でお会いできれば幸いです。

第6章く晴れた心く

目的の場所に向け、歩を進める蘭が気配を感じ振り向いた。

そこにはナイフを振り上げた男の姿が…！

（ら、蘭！？）

新一はようやく蘭の姿を見つけた。

しかし、そのすぐ傍にはナイフを今にも蘭に振り下ろそうとする男の姿があった。

ここからの距離では助けられない！

「らー…」

ん、と叫びかけた時、男が吹っ飛んだ！

どうやら蘭の空手技が決まっただらしい。

「ハハ…相変わらずつえー…」

新一は改めて蘭の空手の強さを確信した。

そして、走りながら胸のポケットから携帯を取り出した。

さっき蘭に掛けたら繋がらなかった…恐らく充電が切れているのだから。

今度は確実に繋がる場所に電話するー。

男はなかなか打たれ強いらしく、大きなダメージを負ったものの気絶していなかった。

「くっ…この小娘が！ぶっころ…」

ジャカ…

男の頭に銃口が向けられる。

「チェックメイト。警察を呼びました。観念して下さい」

新一は銃口をしっかりと男に向けたまま声低く言った。

「く、くそ…」

男はそう言って気を失った。

どうやら気力だけで意識を保っていたらしい。

「し、新一！？どうしてここに！？」

吹っ飛んだ男の所に新一がいてビックリしながら蘭は言った。

「そ、それはその…そう！この通り魔がここに現れるんじゃないか
と思ってよ！」

蘭が心配で追って来たなどと恥ずかしくて言えず、通り魔を追って

来た事にする。

「え！？この人が通り魔！？」

蘭は新一の言葉を疑う様子なく、驚いて言った。

「ああ、この銃もこの通り魔がさっき吹っ飛んだ拍子に落とした物だよ。たぶん、警察に見つかった時とかいざという時の為に持ってたんじゃないか」

「そうだったの…。って、どうしてここに通り魔が現れるって判ったの？」

「それは、通り魔が残したメッセージさ」

新一は笑みを見せ、人差し指を立てて言った。

「メッセージ？」

新一は通り魔が現れた町の名前を平仮名にし、頭文字を取り、それぞれ二文字前にずらすと…

くち・わ・そ・も・あ ↓ て・ん・ち・ゆ・う
になり

「てんちゆう↓てんちゆう↓天誅」

「天誅」の文字が現れる事と全て同じ市内である事を説明した。

蘭はその説明を感心して聞いていた。

そんな事を話していると警察の車が近付いて来た。

その車でやって来た刑事達に通り魔の男は逮捕され、新一と蘭は軽く事情を聞かれ、詳しくは後日改めてという事になった。

そして、その時に通り魔の男が髪の長い彼女にこっ酷く振られむしゃくしゃし、振った女と同じ長い髪の女を襲っていた事、その際振った女への制裁の意味も込めて>天誅<の文字を残そうとした事、全ての文字を完成させる前に刑事に気付かれないように文字を暗号のようにした事、彼女との一番の思い出の夕焼け時に犯行を行っていた事などを知る事になる。

夕暮れの中、朝からの気まずい雰囲気を出した新一と蘭は無言で帰路に着いていた。

紅茶は無事購入済みである。

「ね、ねえ、新一…」

蘭は思い切って留衣との事を聞く事にした。

「ん？何だよ」

「あの、E組の江崎さんの事だけど、付き合ってるんだよね…?」

「その話か。だから江崎とは付き合ってたねーよ」

「うそ！博美が昨日、江崎さんと一緒にいるの見たって言ってたし、私も…見ちゃったの、新一と江崎さんがだ、抱き合ってるの…」

最後の方は声が小さくなってしまったが、隣の新一なら聞こえたはずだ。

「え！？何言ってるんだよ！昨日は彼女の飼い犬のマリーと一緒に捜してたんだよ。抱き合ってたってのは蘭の勘違い！彼女が躓いて、抱き留める形になっちゃったんだよ」

新一はそんな所を見られていたのかと少しビックリしながら言った。

「そ、そうだったの!？」

モヤモヤした気持ちが晴れていく気がした。

でも、新一と留衣の事でこんなにモヤモヤした気持ちになったり、新一と留衣に何も無かったと判ってこんなにもすっきりした気持ちになったりするのとは何故なのか…蘭がこの疑問の答えを導き出すのはそう遠くない未来―。

第6章〜晴れた心〜（後書き）

こんにちは、すず李です。

読んで頂きありがとうございます！

ここでやっと、序章でコナンが何故仔犬を見て、この時の出来事を思い出したのか判って頂けたかと思えます。ちよつと7章に掛かってしまっていますが…。

残すところ次話の7章と終章の2話になりました。

お付き合い頂いてる皆様、本当にありがとうございます！
宜しければ次章もお付き合い頂けると嬉しいです。

感想、評価等頂ければ幸いです。

それではまたお会いできるのを願いつつ…。

第7章　夕日の中で

夕日を浴びながらの帰り、新一は蘭に一昨日の晩にマリー捜しを手伝ってほしいという電話が留衣からあった事や翌日の朝に詳しい話を聞いた事、その放課後に一緒に捜していた事を話した。

「そっか！だから昨日は早く学校に行ってたのね。江崎さんなら小生の時、私が失くした給食費を新一が見つけてくれたの知ってるから…だから新一に頼んだのね。それで、マリーは見つかったの？」

蘭は納得しながら言った。

「ああ、給食費の事言ってたしな。マリーはちゃんと見つかったよ。ちょっと時間掛かったけどな」

「良かった。江崎さん喜んでたんじゃない？」

「ああ、何度も礼言われたな」

新一はその時の事を思い出していた。

留衣は何度も何度も頭を下げていた。

マリーは亡くなった父親が贈ってくれた犬らしく、とても大切にしている事が分かった。

「…ね、ねえ、新一、やっぱり一緒にアメリカ言っても良いかな？」

新一と留衣の事でモヤモヤしていた時は新一とアメリカに行きたく

なかったのに、彼らに何もないと分かり気持ちがすっきりすると素直に行きたいと思うなんて虫が良すぎると蘭は思った。

しかし、この気持ちは本当で、とても強く…。

「あ、ああ。蘭が良ければ…」

新一は蘭とアメリカに行けないんじゃないかと半ば諦めモードだったので少し戸惑ったが、その言葉は彼を嬉しさで一杯にした。

「良かった！」

蘭は安堵し、笑顔で言った。

新一はその笑顔はいつもより可愛いと思った。

アメリカ旅行出発前日の夜、新一は優作の書斎の机の引き出しの中を探していた。

「たく……。大事な資料ならちゃんと持ってけっつーの！」

先程、優作からアメリカに来る時に日本に置いたままの大事な資料を持ってきてほしいと電話があったのだ。

「お！これだな」

新一は黄色いA4サイズの封筒に入った資料を見つけ、取り出す。

その時、封筒にくっ付いていた紙が落ちた。

「こ、これは……！」

新一が拾って見てみると、そこには暗号がびっしり書いてあった。どうやら優作が自身の作品で使うかもしれない暗号を書き留めていた紙らしい。

「これはあれだから、あれはこうなって……」

それから一晩中、新一は黙々と暗号の解読に勤しんだ。

翌日、アメリカ行きの飛行機の離陸直後、意識が無くなったのは言うまでもない。

終章く胸に秘める決意く

「それじゃ、私こっちだから…」

「おお！」

哀と別れたコナンは少し歩くと角から出てきた蘭と会った。

「蘭姉ちゃん！」

「コナン君！今帰り？」

「うん！」

蘭は手に何か袋を持っていた。

コナンは気になって聞いてみる。

「蘭姉ちゃん、それ何…？」

「これ？これね、紅茶の葉っぱなの。さっき買ってきたんだ。とっても美味しいから後で一緒に飲もうね！」

蘭は笑顔で言った。

「うん！」

コナンもそれに答える。

「…今頃アイツ、どこにいるのかな…」

蘭は空を見上げてポツリと言った。

「え…？」

コナンはドキリとして声を出した。

「新一よ、新一！今日紅茶の葉を買いに行ったらちよつと思ひ出しちゃって」

蘭は笑顔だが何だか少し寂しげに見えた。

（蘭…）

蘭はずっと自分の、工藤新一の帰りを待っている…。

影で声を殺して涙を流しているのも…。

コナンは何も言えない自分が、もどかしかった。

「き、きつとまたひよっこり帰って来るよ！」

コナンは笑顔を作り言った。

今はこれしか掛ける言葉が無い…。

「そうね。きつと帰ってくるよね！あ、もうこんな時間！コナン君、早く帰んなきゃ！」

蘭は自身の時計を見て、走り出した。

「待ってよ、蘭姉ちゃん！」

コナンも蘭を追って走りだ出す。

（絶対、元の姿になって戻って来てやっからな、蘭！）

前を走る一番大切な人にそっと心で言葉を掛けた！。

終章く胸に秘める決意く（後書き）

こんにちは、すず李です。

遂に最終章を迎えました。

初めは短編のつもりで書いていたのですが、最終的にこんなに長くなってしまうました…。

最後まで読んで下さって本当にありがとうございます！
心から感謝致します。

次作を書くかどうかはまだ分かりませんが、もしそうなった時はまた再会できる事を願いながら…。

感想評価等、頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6755h/>

春先に吹く嵐

2010年10月26日14時24分発行